

しうやりふかふ

秋雨もしめやかに降り、懐かしき寂しさに久しぶりに侘びしくも野点するもよし。却説さて。

逝にしへの和漢の古き典籍と、歳月経りし皮革の装丁本などを携えて、ひたひたと廊下を歩む。玄関にて折りたたみ椅子を背負い、携えていた書籍を籠（キャスターと長い取手の附いたもの。トロリー・ケース。キャスターを固定し、取手部分を支柱にして籠を上方にスライドさせれば、そのまま簡易な書棚になるタイプのもの。）に積み、これを牽いた。濃く鮮やかな朱の妻折の大きな野点傘を差しつつ天を仰ぐ。

彼は天安真兮。その風貌は、奇天烈。法螺貝片手に山伏が朗々嘯く、

『臍まで隠す鬚・髯・髭を微風に靡かせ

ウィザード・ハットに

水色の パステル・カラー 礼装用 ミリタリー・コート

金糸の肩紐飾りや 房飾り

くたくたになった 蛇皮ブーツ

マッチ棒のよう 細い脚

破れた16オンス・デニムを縫い合わせた スキニー・ジーンズ』

シルエット全体の印象が何處となくカリカチュア的で、古代ギリシアの壺の黒絵のようでもあり、タブレットの楔形文字のようでもあり、究竟の奥義を象徴するエンブレムのようでもあった。

そんな姿で十五分ほど秋雨の野原を逍遙する。思惟を深く沈め、玄き昏きに耽る。

山野に思想が沸々と湧くのであった。かつてマラーやニーチェがそうであったように。それらを録し留めたく焦慮するもとても捉え難く、妥当な言辞がなく、既成の思考概の及ばぬもので、しかも又刹那に去り逝くものであった。

常緑樹の太幹の下に坐つて葉や枝から洩れ零れる雨を避けるため、長き傘の柄を地に刺す。キャラバツシュ・パイプを燻らせ、時折片眼鏡を弄りながら黙して耽った。

持参せる書鳥なとやと問えば、『山海経』、『易経』、『老子』、『碧巖録』、『資治通鑑』、『和漢朗詠集』、『万葉集』、兼好法師の『徒然草』、富永仲基の『出定後語』、プラトンの『饗宴』、ヘーゲルの『大論理学』、ハイデガーの『形而上学入門』、ジャック・デリダの序説が附いたフッサールの『幾何学の起源』等々である。

竟に書見に飽きると俳句を捻り始めた。既に昼を過ぎ得ていた。朝5時に家を出たのだから、さもありなん。

「秋雨やしとしと緑葉なぐさより落つ

おもむろに筆を出し、帳面に記す。帳面は柔らに光を吸いつつ映えさせる和紙で、筆は上品な古品だった。

電話が鳴った。真分はゴーグルを掛け、スイッチに触れると内臓小型マイクが鳶から伸び出る。骨伝導で先方の音声
が『聞こえる』。

「で、何處にいるんだ」

鼻のズレた。裂だった。

「野点さ」

「この雨の中茶を点っているのか」

「淋しい秋雨だからな」

「意味は分らんが、日常感覚を愚弄しているとか言いようがない」

「哀しいかな、それさえも亦た日常さ」

「くだらぬ話はさておき、神栖檜樞村のアソウマイ（安蘇生井）族から饗宴（Συμπόσιον シュンポシオン）に参加したい旨、申し出があった」

「……虚礼を廢した実務的な切り返し。善哉」

「ところが、実は今回何處で何時どうするか決めていなかったんだ」

「ぶ。いつものことじゃないか。つまり今日此處で善いさ」

「そうか、そうするか。何處のノッパラ（野原）にいるんだ」

「なぜ野原だつてわかった？ まあ、いい。」

場所は、拙宅の傍の低い丘のてっぺんの平らな所の蔽檜の木の下だ」

「瑪伽土の丘か。わかった。哥舞伎の車で行く」

車輛はハンヴィー（HMMWV, Humvee : High Mobility Multipurpose Wheeled Vehicle）をベースに改造した十六人乗りのSUV、アルカディア Arkadia 号のじやだ。

ズレ、同源叭羅蜜斗、天平普肅、天之哥舞伎がやって来た。

鬘のような蓬髪に袴姿のズレが周囲を見廻しつつ、

「何だ、やはり茶なんかやってないじゃないか。冗句か」

「不粋な。書を愛でるも茶を喫するも同じだ。風流さ」

「そうか、わかった。」

「ともかく作業を始めるぞ」

興味を失ったかのように雑事にかかる。その背に、

「知の現象に幻惑さるるべからず、感受の本質を見るべし」

「あゝ、あれば見るよ」

振り向き、口角を上げて、にんまりして見せた。

花魁の衣装を羽織る哥舞伎が手際よく二つの大きなタープで三角の山を造り、傘を蓋う。ベ裂はブルー・シートを敷いて、その上に薄いエアマットを敷き、更にその上に4 m四方のペルシア絨毯を敷いた。棟のところは雨が漏らないようにビニール・シートを掛ける。叭羅蜜斗が折りたたみ式のテーブル&椅子をならべた。哥舞伎がランプを吊るす。

「日が短くなつたせいじゃないな。天候のせいであんな暗いんだな」

午後2時であつたが、ランプが灯ると忽然と簡易な三角屋根の砦が現われたかようであつた。

真分を上座に四人が向かい合つて坐る。一斉に乾杯。真分上が問う、

「また蕭々太か。奴こそは現代の鬘童子（マールンキヤープッタ）摩羅鳩摩羅、摩羅迦子、マールンキヤ尊者の子」だな」

「さよう」

ベ裂は頷きもせずに応う。

「鍋とか出すか」

金髪スパイキー・ヘアの叭羅蜜斗がスキットボトルを呷つてから、無表情にそう言った。車のトランクから降ろし、鍋とツィ・バーナーをテーブルの上に出し置いた。

「これじゃ食えないぜ」

哥舞伎がそう言う。叭羅蜜斗も、

「当たり前だ。作業台を置くか。もうちよつと屋根のある場所がなくっちゃならねえな」

7 m四方の正方形の特大のタープを出し、脚立を立てて、2か所を大樹に結び、タープ三角屋根を蓋うように伸ばして張り、二本の支柱を組み立てて、残りの2か所を留めた。

さらに調理作業台を何台か出し、三角屋根の外、初代の砦の外に設置し、バーナー3台と鍋の類、まな板などを置いた。特大タープが三角の砦の上を蓋つたためにできた庇があるので、もうそこも濡れない場所だつた。

ベ裂のスマートフォンが鳴った。

「2時間くらい遅れるらしい」

「それも又善し」

真分が満足気に唸つてバーボンを呷る。

バドワイザーを飲みながら、ふと叭羅蜜斗が、

「あゝ、よく見ると俺らだけで席がいっぱいじゃねえか。へへ、客人はおろか、他のメンツが来ても雨曝しだぜい」
だがベ裂は鷹揚に、

「後から来た連中で何とかするだろうよ。飲もうさ」

そうするうちに午後3時頃、肥った体躯の白舟大衆がミニに乗ってきた。草原に入るとタイヤが泥濘に埋まる可能性があるので、道沿いに停めて大荷物を抱え、滑稽な小走りでやって来る。

「やあ、始めているね。食材を持って来たよ。さあさあ、生きることとは食うことだ。生存原理に逆らっても意味はない。おいらたちは肉体のフィジカルな大海の表面に浮かぶ木っ端に過ぎない。

弟らおうにも弟らう動機の源泉は海の潮流なのさ。解脱だってア・プリオリな働き（心機）に身を任せているじゃないか。あはは」

ガネーシャ *ganesha* のような男が笑う。

哥舞伎と叭羅蜜斗は大楽を手伝って、延長された天蓋の下にテーブルと椅子を出す。

「やあ」と

大楽がそう言いながら腕をまくった。

オリブ・オイルの瓶やトリュフやフォアグラやチーズ各種、紐で縛った肉やブイヨン、パスタを茹でる大きな寸胴鍋や生ハムの塊、鴨肉のオレンジ煮、様々なパスタ、生牡蠣、巨大なオマール海老、オリブの実に胡桃に黒胡椒、アンチョビ、ロッシニ・ステーキ、アントルコート・ステーキの赤ワインソース添え、数々のワイン……

ツ・バーナーのコンロが三つならぶ隣に、大楽は三角屋根の外、特大タープの下に作業台を設置し、いくつもの包丁、レードル、チーズ削り器、ウェッジウッドの皿、マッピン&ウェップのスターリング・シルヴァーのナイフやフォークやスプーン、テーブル・クロスやナプキン……

独り忙しく楽しげに動く大楽。彼が作業に入ると、哥舞伎も叭羅蜜斗も後は任せて坐り、葡萄酒の栓を抜いて瓶を傾け、談笑する。真今とベ裂と普蕭は程良く酔ってきた。車好きの哥舞伎は延々と車談義を繰り広げ、しばらく続くと戦国時代の話に変わり、「信長や秀吉の時代は豪快だった。文化もあでやかで歌舞伎もその時代に生まれた。茶も教養者の美学がその頃生まれた」と。

叭羅蜜斗はパンク・ロックの歴史を中心にロック、ブルースの叛逆の精神を延々語る。

「すべてのアートは叛逆と革命の繰り返しだ。いや、人の精神の営みは大局を俯瞰し、根底を究明すれば、常にそういうものなのだ。ラスコーの壁画だって描き上げた当時の人間に与えたインパクトは革命的な興奮だったに違いない。もっと大胆に言えば、仏教のサンカランの説話に見られるように、無常観に基づく世俗的な価値の否定（社会性の否定・家族愛の否定）や、「眼には眼を」の時代に「右の頬を打たれば左をも差し出せ」と言った思想は、当時としては破壊的な衝撃を持ち、革命的な、まさしく当時の感覚にはパンクな過激さがあつたはずだ。侘び寂びだって血気盛んで傾奇と絢爛の安土桃山の時代には叛逆の *VELL* だぜ。

叛逆は世の必然だ。生物の進化だって旧態への叛逆だ。すべては更なる明晰確実を追究し、更なる *Vivid* 感を欣求して飢渴し、更なるリアリティへと焦燥し、自らの頭を踏んづけて新たな地平へ突破しようと藻掻く。身を裂くかのように。自裂の狂気、それが叛逆のロックだ」

真今ランプの下で小脇に置いた籠の書棚から本を次々取り出しては書見を続け、普蕭は物思いに耽りながらも楽譜を静かに書いている。

午後4時にはすっかり暗くなった。料理が運び込まれ始める。シャンパーニュの注がれたフルート・グラスが会席する者らを廻った。

サラダに続いて、前菜。パスタが運ばれる。魚のポワレ、皮がパリッと香ばしく、白身が柔らかく、淡泊ながらも味わい深い。どんどん運ぶ。肉が来た。それはまさにキヤラメルを塗ったかのような色彩と照りであった。

「この黄金のような輝き、つやの素晴らしさ。豪氣勢だ」

哥舞伎が眼を輝かせて鴨のオレンジ煮にナイフとフォークを入れる。ロッシーニ・ステーキ、アントルコート・ステーキの赤ワインソース添えも次々運ばれ、ようやく大衆が席に着くことができた。「乾杯！」

雨脚が強くなる。音は雨滴が土を突き撥ね、弾けさせている事象を生々しく皮膚感覚に伝える。

波打つ赤い髪は炎春慶が濡れるも構わず、ハーレーダヴィッドソン Harley Davidson に乗ってやって来た。所々でタイヤを泥の泥濘に捉われながらも、泥塗れで席に着くと、拭うことも忘れ、パンクを語る叭羅蜜斗を遮り、ヘヴィ・メタルの魅力を語って倦まない。「結局は炎のような情熱がすべてを動かす。カストロを見る。彼は偉大だ。百にもまったく足らぬ数で五人乗り（最大でも二十五人乗り）のボートに乗って海を涉ってキューバに上陸し、迎撃されて隊はバラバラ、ほとんど壊滅状態になりながらも潜伏してゲリラ的に闘い、最後にはバティスタ政権を打倒した。まさに男のロマンだ。言説は絶死する」だが語り倦むとギターの練習を始めた。

犇之龍肯がレンジローバーを操縦して来た。英国女王が牧地を行くのにも使われる車輛だ。当然、泥濘地など意に介さない。

犇之の姓を名乗る以上、彼も王家の血筋だが、黒龍ヶ淵分家なので王族ではない。なお、犇裂は第一代犇玖邇之王から数えて第五百二十七代に相当する。彼は冷めた目で虚空を見つめ、雨の雫を拭い、

「雨は憂鬱ですね。日も暮れてきました。陰陰滅滅とはこの事です。でも仕方ないですね。これが天地の理だし、他に何處にも逃げませんから。そうです、他の次元には逃げませんからね。足掻いても足掻かなくても同じです。いや、諦めじゃなくて。その証拠に無常観を言う佛陀はさような思想を否定していました。

考えても見てください、無常を虚しいと嘆くのは執着があるからです。無常を晰らめ（諦め）ていれば、悲嘆や虚しい気持ち、ネガティブな感情とは無縁です。無はいかなる結論にも導かない。いかなる情も生ぜしめない……ではないでしょうか」

そう言いながら龍肯はゴブレットでビールを呷る。タブレットを出した。独白しながら詩を打ち込む。

「それも亦た否だ。又は否も亦た否だ。又々は是也。永劫 *fugue* だ。埒なく、処置すべき處なしだ。無為自然ともいふべきか」

そう言い、哥舞伎はコニャックを傾け、チーズを噛む。

平衛隆臥と犇佐早蕨は軽トラックで来た。軽トラも野原に入ってきた。席に着くも、

「いや、寒いですね。実は寒暑の感覚は共有ではありません。冷暖自知です」

隆臥がそう言った。身嗜みも緩い彼は無表情無感動であつた。哥舞伎がジョッキを掲げて言う、

「寒いか、さもありなん。そつちは横風を塞ぐものがないから」

さらさらした前髪の早蕨がアペリテフにシェリー酒を舐めながら、控え目に提案する。

「両側に車を置くというのは、いかがでしょうか」

「おゝ、いいかも」

そのように実行された。真今から見ても左にアルカディア号、右にレンジローバーと軽トラックを駐車する。

「ありがとうございます。いくらかマシになったようです……」

隆臥は亦も無関心にそう呟いた。

午後5時。轟佐玲央、天平龍児、空鼓斗平瑠、贅周平寛太、贅淋太良、天平穹、炎裂帛汰らがダッジバンに乗り合わせてやつて来た。前例に倣つてダッジバンを壁にしたが、既設の特大タープのみでは長さが足りず、彼らの分までは屋根のある場所が確保できず、又テーブルや椅子も新たに出さなければならなかつた。

「僕ら椅子もテーブルも支柱やタープと併せて持参しました。小タープを一番上の特大タープと結び繋いで、屋根を延長します」

小タープを二つ繋げて張り、テーブルと椅子を運び、来客も想定した席数を確保した。

龍児はさらに提案した。

「まだタープがあります。雨寒を凌ぐのは重要な真理です。なぜウイルスにやられちゃいけないのかという問いに純粹理論による答はありません。なぜならば健康を害すから、生命は大事だから、という解答は次の更に答えられない問いを生むだけに過ぎませんから。」

さあ、屋根になつている特大タープ及び二つの小タープの脇にもタープを繋いで垂らし、地上にペグで留めて横壁にしましょう」

午後6時。かくして要塞は完成した。

真今・ベ裂叭羅蜜斗・普蕭・哥舞伎のところは二重の壁でかなり暖かく、しかも足下には絨毯があつた。又飲み始めも早かつたので、かなり氣勢も上がっている。

普蕭が言う、

「こつちは、ほぼ家だな。外界から遮断されていて、普通に部屋にいる感覚だよ」

哥舞伎も腕を組み、和牛A5級の霜降り肉を頬張り、「柔かい」と言いながらワイン・グラスを傾けて味のシンフオニーに酔い痴れる。「ブラシヨワの古城に籠もつて宴を催す、贅に飽いた悪魔になつた気分だ」

普蕭が鼻で笑い、

「妄想家だな」

「空想は心の翼さ。想うは自由だ。」

しかしこうして眺めると壮観だな。眞神の若き雄志が集う曼荼羅だ。二重の壁に囲まれて、この奥の奥なる奥所にいると、究竟奥義になったような気分だな」

「なるほど、眞神曼荼羅か。確かにそうだ」

真分が顔を上げて頷いた。

春慶・大楽・隆臥・龍肯・早蕨・龍兎・玲央・斗平瑠までは特大タイプの下で広々しているが、足下には雨水が流れ込んで踏まれることで泥濘み、野趣が楽しめるとも言える。

現に斗平瑠は陸軍の編み上げ防水ブーツを履いていて、戦場に野営する兵士の気分を堪能しながら、靴の性能を味到していた。革製とは何と味わい深く汲めども尽きぬものだろうか。噛めば噛むほど滋味豊かなモン・サン・ミッシェルの周辺にいる羊の肉ようだ。

なお彼は古いフライトジャケットのB3を着ていて、その羊皮の匂いをも佚し^たんでいた。

そして霧雨蕭々太、驟雨龍仁次、濛雨土砂降、霖秋夢弓月らがゲレンデバーゲンに乗り合わせて来た。

「いやいや、お待たせいたしました、申し訳ありません」

「氣にされるな。こちらは既に始めております。すべて無礼講で」

各々席に着く。客人と言えども、特に優遇されることもなく、最後に来た者は一番外に近く坐ることを余儀なくされる。

彼らの位置は両サイドに車が停めておらず、横壁タイプのみだった。

「なかなか粋なものだ」

蕭々太がそう言い、

「しかし若干エスプリが効き過ぎと言えなくもない。失礼でなくば、我らの車を動かしたいのですが」

「さもありなん」

龍仁次が無言で席を立て、ゲレンデバーゲンを動かし、壁にした。それでも屋根根の小さい場所、すなわち淋太良、周平敢太以下、土砂降、夢弓月までは風も洩れ、やや寒く、特に入り口の附近に坐った土砂降と夢弓月のあたりは少々雨すら当たった。「Burberry」の防水は偉大だ」と言つて夢弓月は香辛料入りの暖めたワインを受け取る。偉丈夫の土砂降は魁夷の風貌、寒風来ようとも巖の如し。

「いい面構えだ」

ズレが評した。真分も、

「どんな言説よりも雄弁で、かつ当てになる」

龍仁次はソフト帽を傾け、顎鬚を撫でながらクールに構えている。

歴史を共有する民族の盛大な乾杯が行われた。カーリー・ヘアに近い巻き毛の長髪を濡らす蕭々太が謝辞を叙べ、

「眞神とアソウマイ、我々はともに一圈の生きる者たちです。多くの運命を共有してきました。対立する時期もありま

したが、今は平和です。歴史の総和の中では概ね平和に影響し合い、共栄共存してきました。歴史の総和で見ればという条件付きではありますが。

家によつては積年の恨みを言う者もあります。それも情として已むを得ないもので、我々は強いて制御しません。ただ我々は夢の中を生きているのではない、現実を生きる以上は現実に基づかなければ非現実的で、真実と乖離するでしょう。

すべての事象は実体のない、無限に分割できる複数の要因の関係性に於いて刹那々に、複雑系的生成運動によつて一瞬一瞬に生まれ消え、揺らぎながらも、なおかつ時間性の中を流動しつつ、あたかも移り変わる影のように成つていきます。

物事を一様に判断する考えのすべては誤りであるばかりではなく、この世の悪です。すべては個別に複雑系的に判断しなければなりません。愚かな者たちはその作業を面倒臭がり、矯激な復讐に走ります。彼らはその個別の動機の構成要素から解析される真の動機の質及び程度に応じて罪があります。

臨床的に事実に応じingることを客観実証科学精神と呼ぶならば、人間の進化の方向はそちらにあります。人類史は客観的視点の獲得の歴史でもありました。動物には物という概念がないと言います。動物にとつてすべての事象は『怖い』『おいしそう』『好ましい』『脅威たる者』というシグナルに過ぎません。エサは『おいしそう』というシグナルでしかありません。獲得の欲望を動かします。敵は『怖い』『脅威たる者』というシグナルに過ぎず、戦いのスイッチを入れます。

人間は物を自分に置き換えて存在者として認知します。同情は群れなす社会的動物の本能の一つですが、また自己超越・客観化への契機でもあります。これこそ進化の先にあるものです。我々はこれを目指すべきです。

これを目指すためには、客観性の獲得、すなわちすべて事実に基づくことが必要です。

したがつて歴史は総和で見なければなりません。歴史全体の悉くを鑑みて、総和の中で判断しなければなりません。その意味でこの会合は実に甚深なる高貴高尚なる意義を有するのです」

ぐいっと清酒を呷る。

しばし歓談があった。

夢弓月は会話よりも荒れる雨を眺め、楽しんだ。テーブルの裾は濡れ、水滴が基盤の基石のように散りならぶのを見つめる。時々正面で黙々食する土砂降を見た。

「君はまるでこの自然のようだ。

無表情で無情で無慈悲だ。しかし崇高な超人の兆しを帯びている。次の時代には恐らく論理は死に絶える。我々は論理的思考の極北まで到達した。西洋の合理主義は終わり、東洋の時代が来る。僕は昨今、参禅や『大楽金剛不空真実三摩耶経』の暗誦及び研究を始めたよ。機（はたらき）を探したいんだ。

君は僕の先を行くね。まるで龍みたいだ。何も語らないのにどんな哲学者よりも甚深だ」

蕭々太と眞神族らとの議論をしつと見ていた龍仁次は、

「人権は国家や信仰に優先する。人権の前に内政干渉はない。しかし国家がなくては人権を護れない場面もある。また宗教を至上としなくては死に面した際の魂の救いとなるには力不足だ。国家や民族という概念は往々にして人を一様に取り扱う結果を生む。また信仰は常に一様でなくば信仰たり得ない。

蕭々太よ、君の議論ではこれをどう解決するのか」

「まずどのような事象にあつても、解決も結論もない。その理解の上で言えば、すべてをケース・バイ・ケースで正しく判断せよ、その一言だ」

その上で意を決したように立ち上がり、蕭々太は真今に問いて曰く、

「さてところで尊師、天易氏よ、衆人知る如く『無門関』等に於いて趙州無字の公案あり。

参照すべし原文左のとおり。

『無門関』第一則

趙州和尚因僧問 狗子還有佛性也無 州云無

趙州和尚 因みに僧問ふ「狗子に還つて仏性有りや」 州云く「無」

ここに言う無というのは識別可能な『有・無』という設定の上に於ける無にあらず、真の無空にあると解すが、是か非か」

真今は黙していた。蕭々太は続けた。

「又これ『犬に仏性ありやなしや』と問われ、『無』と答うも和訳『無し』と言うは奈何。寧ろその仮『無』と攔く方が理に適いてあらずや。

以上、お尋ね申す所存に候」

真今は呵々大笑した。

「いやはや。

無を問われるとは。

これ何かを問われるというべきものは。

語れば語るほどに矛盾に窮するなり。釈迦ならば無記とし、捨置除却を徹すも昨今それいかにもあざとくも觀ぜられる。もし君究する心あらば関羽の大刀を奪いしが如く、『仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し』の機を字究すべし。小生、唯一献の美酒を君に奨めるのみ哉」

そう言つてショット・グラスを掲げた。

蕭々太は輝きならぶグラスの中からオールド・ファッションを扨び、スコッチを満たして杯を挙げた。

青線が横壁をなすターフ

